

ジヨルジェ・アマード 『丁字と肉桂のガブリエラ』 (六)

第二部第三章、原文一四七頁から一七九頁までの翻訳

尾 河 直 哉

Tradução japonesa de *Gabriela, cravo e canela* de Jorge Amado (6)

NAOYA OGAWA

キーワード

二〇世紀ブラジル文学 (literatura brasileira do século XX) 、ブラジル北東部 (Nordeste) 、カカオ地域 (região do cacau) 、バイーア州 (Bahia) 、イリエウス (Ilheus) 、ブラジル民衆文化 (cultura popular brasileira)

(承前)

第二部

お金が湯水のように流れ、暮らしが相貌を変えるイリエウスの街で、その台所から祭壇まで (ちなみに、ここに祭壇が出てくるのはなにかしら宗教的な悶着によるものではない)、一庶民の娘が味わった喜びと悲しみの数々。結婚あり、離婚あり、愛のため息と嫉

妬の呻きあり、政治的裏切りと文学的講演あり、テロ、逃亡、燃え上る新聞、選挙戦も取り揃え、孤独の終焉、カポエイラとコック長、一年の終わりの暑気と祭、歌と踊りとどさまわりのサーカス、慈善バザーと潜水夫、船が着くたび上陸してくる女たち、殺し屋の最後の狙撃も欠かさず、港の大型貨物船と無用になった掟、一輪の花とひとつの星も加えて語るはすなわち、

丁字と肉桂のガブリエラ

第三章

(大いなる星のもとに生まれたにもかかわらず、自宅の庭に囚われている)

マルヴェイーナの秘密

モラルは衰え、風俗は墮落し、山師が外からやつてくる…
(マウリーシオ・カイレスの演説から)

マルヴェイーナの子守歌

おやすみ、寝入った可愛い子
すてきな夢をごらんなさい
おまえが寝入ったベッドから
お船に乗って出かけなさい

わたしはお庭に閉じこめられて
花の鎖に縛られて
助けて！ 息がつまりそう
助けて！ いつか殺される
助けて！ 結婚させられる
お家のなかに葬られ
台所ではおさんどん
物置小屋ではおかたづけ
ピアノのまえに座らされ
ミサでは懺悔させられて
助けて！ 結婚させられる
ベッドの上ではらまされ

おまえが寝入ったベッドから
お船に乗って出かけなさい

わたしの夫がご主人さまよ
わたしの人生まるまる決める
おまえはこんな服着なさい
おまえは香水これ着なさい
おまえはこれを欲しがりなさい
あまえは眠くなりなさい
泣くことだけがわたしの権利
殺す権利は夫だけ

おまえが寝入ったベッドから
お船に乗って出かけなさい

助けて！ ここから連れ出して
愛する夫が欲しいのよ
敬う人などいないわ
いいのよ、どんな男でも
金持ちだろうと貧しかりょうと
イケメン、ブ男、混血ムラートだつて
だれでもいいから連れ出して
奴隷にだけはなりたくない
助けて！ わたしを連れ出して

おまえが寝入ったベッドから
お船に乗って出かけなさい

お船に乗って出かけるわ
だれかがいても、ひとりでも
祝われようが、呪われようが
お船に乗って出かけるわ

結婚するため出かけるわ
お船に乗って出かけるわ
屈辱するため出かけるわ
お船に乗って出かけるわ
仕事のために出かけるわ
お船に乗って出かけるわ
行くべき処に出かけるわ
ここから永遠にでかけるわ

おやすみ、寝入った可愛い子
すてきな夢をこらんなさい

花を挿したガブリエラ

バラ、キク、ダリア、マーガレット、フランスギク。イリエウスの広場の花壇には花が咲き乱れていた。マツバボタンは芝生のなかで花を開いている。咲く時を間違えないこと行政監督局の時計のように正確で、緑の芝生に深紅が点在していた。マリヤード側では、原始林のただなか、ウニヤンとコンキスタの湿った密林に幻想的な蘭がいつせいに花を咲かせている。しかし、どこからともなく立ち上り、街いっばいに広がった香りの出どころは庭園でも、密林でも、大事に育てられた花でも、野生の蘭でもなかった。出所は倉庫や埠頭や輸出業者の建物。実は、乾燥したカカオの実が放つ香りだったのである。外からやってきた人には頭がくらくらするほど強烈だが、イリエウスの人々にはもうだれも感じないくらい慣れきった香りである。その香りが街に、川に、海に広がっている。

カカオ畑では、ほほ熟したカカオの実が、さまざまな色合いの黄色で風景を金色に染め上げている。収穫の時は近づいていた。これ

ほど豊作になるとはだれも予想していなかった。

ガブリエラは甘味を作っては大皿に載せていた。隠元豆の粉を練って椰子油で揚げたアカラジェ、つぶした隠元豆にデンデ椰子油と干し海老を入れバナナの皮で包んで蒸したアバラ、団子、フライはさらに大きな大皿に載せる。ちびくろトウイースカがシケモクを吸いながら皿が準備できるのを待ち、その間、ボールで交わされた会話や特に好奇心をくすぐられた出来事をガブリエラに話して聞かせる。ムンデー・ニョ・ファルカンの十足の靴の話。浜辺で行われたサツカーの試合の話。反物屋で起きた窃盗事件の話。象、キリン、ラクダ、ライオン、トラを連れてバルカン大サーカスが近々やってくるという広告の話。ガブリエラは笑いながら聞いていたが、サーカスのニュースには聞き耳をそばだてた。

「ほんとに来るの?」

「電柱にはもうポスター貼ってあるよ」

「あたしの田舎にもいちどサーカス来たことあるんだ。おばさんと一緒に見に行ったんだけど、火を食べる男がいたよ」

トウイースカは計画を立てていた。サーカスがやってきたらロバに乗った道化師にくっついて町中をあちこち回ることにしよう。サーカスが魚屋の空き地にテントを張るときにはいつもそんなことをしていたのである。ガブリエラは道化師という言葉を知らなかった。

「道化師ってなに?」

子供たちならこう答えるに違いない。

「女の人を盗む泥棒だよ……」

ところがトウイースカとって道化師とは、おでこに石灰で印をつけてくれる人だった。この印があれば、夜、無料でサーカスに忍び込める。さもなければ舞台を片づける雑役夫に手を貸して親しくなり、自分をなくてはならない存在にしてしまう。その間、靴磨きの箱はほったらかしであった。

「サーカスの方がぼくを連れて行きたがってたんだぞ。団長なんかぼくを呼んだんだから」

「どうせ雑役夫でしょう?」

トウイスカはカチンときた。

「ちがうよ。アーチストだよ」

「なにするつもりだったの?」

ちびくろの顔がぱつと輝く。

「猿の芸を手伝うんだ。ぼくも出てき。踊りも踊って…一緒に行かなかつたのはママのことがあつたから…」母親のライムンダはリユーマチで手足が痺れるようになってから、仕事の洗濯屋が続けられなくなり、息子たちが家計を支えていた。フィローはバスの運転手。トウイスカはいろんな仕事に精通している。

「踊りなんか踊れるの?」

「見たことないの? じゃ見せてやろうか」

トウイスカはその場で踊り始めた。体の中から踊りが沸き上がってくる。足は新しいステップを編み出し、体は解き放たれ、手は叩きながらリズムを取っている。その様子を見ているとガブリエラも一緒に体が動き出した。もう我慢できない。大皿も鍋もつまみも甘味も放り出してスカートを手で持ち上げた。今度は二人で踊る。庭にはちびくろと混血女のたつた二人。この世に存在するものなど他にない。トウイスカは途中で踊りを止め、逆さにした空の平鍋を手で叩くことに専念した。ガブリエラはくるくる回り、スカートが浮き上がる。腕はリズムに合わせて開いたり閉じたり。体はばらばらになったかと思えばまたひとつにまとまり、尻を振りながら微笑む。

「あらたいへん、お皿の料理…」

大急ぎで皿を仕上げると、つまみの上に甘味を載せ、二つともトウイスカの頭の上に載せる。トウイスカは口笛を吹きながら出ていった。ガブリエラの足はまだステップを踏んでいる。踊る

のつてなんて楽しいのかしら。しかし、揚げ物の音が聞こえてきて、あわてて台所に入ってしまった。

シコ・モレーザがお隣に戻る音が聞こえてきたときには、すっかり用意ができていた。弁当箱を手にスリッパをつっかけ、ドアに向かう。ナシブにお昼を届け、シコがいよいよあいだの手伝いをするのだ。しかし、ガブリエラはきびすを返すと庭の花壇からバラの枝を一輪摘んで耳に挿した。ピロードのような花びらが顔に触れている。

このおしゃれを覚えてくれたのは靴屋のフェリーペだった。坊主にたいしては口汚い呪詛の言葉を吐くアナキストだが、ご婦人にたいしては、まるでスペイン貴族のように懇勤な口をさく。「いちばん素敵なおしゃれでございます」とフェリーペは言う。

「セビアのムチャチャス(娘さんたち)はみなさん髪に口ハ(赤い)花を挿してますよ」

革なめしを生業にしながらもう何年もイリエウスに暮らしているのに、フェリーペのポルトガル語にはまだスペイン語が混じる。以前はあまりバールに來なかつた。鞍や馬具を修理したり、乗馬用の鞭を作ったり、靴や長靴の革をなめしたりよく働き、暇な時間があれば赤い表紙の小冊子を読んだり、モデーロ文具店で議論していたからである。バールにやってくるのはほとんど決まって日曜日だけ。バックギヤモンとチェッカーをするためだが、なかなか手強い相手だった。ところがこのごろは昼食前の食前酒の時間になると毎日やってくる。ガブリエラが来るとスペイン人は白いメッシュを反抗的に逆立てた頭をもたげ、若者らしい非の打ち所のない歯を見せて笑う。

「サルベ(これはこれは)・ラ・グラシア(お美しい方)、オレ！」

そう言う指でカスターネットの音を出すのだった。以前にはたまにしか顔を見せなかつた客たちも最近では毎日店に通うようになっていた。ヴェズーヴィオは大繁盛だった。ガブリエ

ラの作るつまみと甘味の評判は、食前酒好きのあいだにたちまち広まり、港のボールからも客がやってきたため、黄金のピンガの主人プリーニオ・アラサーは不安になっていた。ニョーロガール、トニコ・バストス、隊長は入れ替わり立ち替わりナシブの昼食のお裾分けに預かつては口々に料理の素晴らしさを讃えて店を後にした。店のアカラジェ、バナナの葉で包んだ揚げ物、肉団子、ピリ辛のお通しは歌に歌われ、詩に詠まれた——詩に詠まれたというのは、ジョズエー先生が酒肴と趣向を、名菓と名花を掛詞にしてこれらの料理に四行詩を捧げたからである。ムンデイーニョ・ファルカンなど、将来友人でアラゴアスの上院議員が沿岸航行船に乗ってイリエウスにひよっこり立ち寄ることがあるかもしれない、そうなれば自宅で晚餐会を開くことになるだろう、そのときにはガブリエラをぜひ貸し出してくれないか、と早くも申し出ている。

食前酒やサイコロポーカー、ピリ辛アカラジェや食欲を刺激する塩鱈団子を求めて人々がやってきた。人が人を呼びその数は増えていったが、それはおもにガブリエラの上質な味付けに依るところが大きかった。しかも、近ごろでは、定刻より少し長く店にぐずぐずして、昼食を遅らす客が多かった。ナシブの弁当箱を持ってガブリエラがボールにやってくるようになってからである。

ガブリエラが入ってくると歓声があがる。ガブリエラは踊るように歩き、目を伏せたまま唇の微笑みをそこにいる全員の口に振りまく。店のなかを進みながら各テーブルにこんにはを言ってカウンターに直行すると、弁当箱をそこに置くのだった。通常であればこの時間は客が少なく、家に急いで帰らなくてもよい客がひとりふたり残っているくらいだ。ところが、常連たちはガブリエラの到着を見計らって時間を調節し、ボールに現れてから最後の一口を飲むなどして、食前酒の時間を少しづつ引き延ばすようになった。

「ビッコフィーノ、火酒とベルモットのカクテルを持ってきてくれ」

「ここにはベルモットふたつだ……」

「もういつちよ行くか？」サイコロが革製のダイスカップの中で音を立て、テーブルの上を転がる。「キングのスリーカード……」

ガブリエラはすぐに客が捌けるよう給仕を手伝っていた。そうでもしないと弁当が冷えて料理の味が落ちてしまうからである。コンクリートの床でスリッパを引っかけ、髪をリボンでひつつめにして、顔はすっぴんのまま、腰をふりふり給仕した。ガブリエラがテーブルのあいだを歩き回ると、口説き文句をかけてくる男がいれば、じつと訴えるような目を注ぐ男がいる。博士は手を叩きながら「マイ・ベイビー」と呼びかけていた。あちらに微笑み、こちらに笑いかけ、腰のくびれがなければまるで少女だった。こうして突如、ナシブのボールは活気づいたのである。ガブリエラがいるだけで、ボールがそれまで以上にもてなしの良い、打ち解けた場所になったようであった。

ナシブはガブリエラがやってくる姿をカウンターから眺めていた。髪に挿したバラが耳元に見える。アラブ人は目を半ば閉じた。弁当箱には美味しい料理が詰まっているはずだ。この時間になるとナシブも空腹を感じていた。皿に載ったパイや小海老のパテや団子をつつかないよう注意しなければならぬ。しかもガブリエラが入ってくるということは、ほとんどの席でもう一杯注文があるということに他ならない。それはとりもなおさず売り上げの増加を意味している。それらをおくとしても、昼間にガブリエラの姿を目にしながらか、前夜のことを思い出し、その日の夜のことを想像するのはナシブにとって大きな喜びだった。

カウンターの後ろでナシブはガブリエラをつねると、スカートのなかに手を入れ、胸に触れる。ガブリエラがこそっと笑う。楽しいひとときだ。

隊長がガブリエラを呼ぶ。

「ぼくの愛弟子ちゃん、おいで。次の一手見ててごらん」

店に客がほとんどいないときにバックギャモンの秘儀を伝授しようとしていたら、隊長はガブリエラを愛弟子として扱い、自分は師匠を気取っていた。ガブリエラは頭を横に振って、「ばばぬき」以外どんなゲームも覚えられたためしがないと笑ったが、隊長は試合の終了を遅らせてガブリエラの到着を待ち、ゲームの山場に立ち会わせようとするのだった。

「ここに来て、運をはこんできておくれよ」

運はニョーリガールに微笑むこともあれば、靴屋のフェリーペに微笑むことも、また博士に微笑むこともあった。

博士は「マイ・ベイビー、ありがとう。神様が君をいつそうきれいにしてくれるように」と言つてガブリエラの手をぽんと叩く。

「いつそうきれいだつて？これ以上きれいになんてなれるもんか！」隊長が保護者然とした態度をなかくり捨てて抗議する。

ニョーリガールは何も言わず、娘をただじつと眺めるだけ。靴屋のフェリーペは耳に挿したバラを褒めちぎる。

「ああ、ミス(おれの)二十アーニョス(年)はなんだつたんだ：」フェリーペはジョズエーに、この花を、この耳を、この緑の瞳を歌ったソネットを作つてくれないか、と頼んだ。ジョズエーは答えて言う。ソネットなんかじゃ物足りません。オードかバラードを作りますよ。

時計が十二時半を告げると一同我に返つて立ち上がり、店を出る。チップをはずみ、そのチップをピッコフィーノが爪に垢のたまったがめつい手で受け取る。みな、時計に背中を後押しされながら仕方なく店を出てゆくのだつた。ボールがからになると、ナシブは座つて昼食を取る。ガブリエラはテーブルのまわりを動き回つて、ビールの栓を抜いたり、グラスに注いだり、食事の世話をする。満腹になつてげつぷをしながら——「健康にいいから」とナシブは弁解する——料理を絶賛すると、その小麦色の顔がぱっと輝く。弁当箱を片づけると、シコ・モレーザが店に戻つてきて、今

度はピッコフィーノが昼食のために帰る番だ。ガブリエラは、ボールの裏手の広場に面した木陰にデッキチェアを用意し、「ナシブさん、じゃ、またあとで」と言つて家に帰つて行く。アラブ人はサン・フェリックスの葉巻に火をつけると、一週間遅れのバイアの新聞を手にとつて、ガブリエラが腰をふりふり踊るような足取りで教会の角を曲がつて消えてゆくのを目で追うのだった。髪に挿していた花はもう耳元になかった。ふと見るとデッキチェアにある。腰をかがめたときにたまたま落ちたのだろうか？それともわざわざ耳元から抜いてそこに置いていったのだろうか？真つ赤なバラは丁字の香りがした。ガブリエラの香りだった。

長いあいだ待たれた望ましからざる客

隊長と博士はひとりの男を連れ、幸せそうな面もちでいつもより早くボール・ヴェズーヴィオにやってきた。男は三十を少し過ぎたくらいだろうか。気さくな顔立ちのスポーツマンタイプである。紹介される前から、ナシブはそれが技師であることに気づいた。こんなに長いあいだ待った噂の人物が十分に神秘のボールを脱いだのだ：

「こちらロームロ・ヴィエイラ博士、交通省の技師でいらつしやる」

「はじめまして。よろしくお願いいたします」

男はついにやってきたのだ。日焼けした顔。短く刈り込んだ髪。額には小さな傷跡がある。博士はまるで著名な親近者か絶世の美女でも紹介するときのように、満面に幸せそうな微笑みを浮かべている。隊長が冗談を言う。

「このアラブ人は、当地にこの人ありと言われた人物です。この男ですよ。混ぜ物をしたドリンクでわれわれに毒を飲ませ、ポー

カーでわれわれの金をくすねたうえ、みんなの暮らしぶりに通じているのは」

「隊長、冗談はよしてくださいよ。先生が本気になさいますよ」

「いや、実はよい友だちです」と隊長は訂正する。「誠実な人でして」

技師は微笑んだ。取って付けたような笑みだった。疑り深い目でも通りやボール、映画館や近くの家々を眺めている。家の窓からは好奇心に満ちた眼差しがこちらを眺めていた。テラスのテーブルを囲んで腰掛け、こちらの様子をうかがっている。窓辺に姿を見せたグロリアの体は洗ったばかりで濡れていた。髪の毛も起き抜けのまま。櫛を通していないから乱れている。ところがよそから来た男がいると分かるとじっと男を見つめ、身繕いするためにあわてて奥へ駆け込んでいった。

「グラマーでしょ？」と言って隊長がグロリアが孤独なわけを技師に話す。

ナシブが自ら給仕をした。ビールがまだあまり冷えていなかったので、氷を持ってくる。ついに技師がやってきたのだ！ 前日の『日刊イリエウス』の第一面は、今日、技師がバイアーナ号で到着する旨を太字で知らせていた。記事にはこんな辛辣な言葉が添えられている。「間抜けとやかみ連中は、技師など来るはずがない、いやそもそも省内に技師なんぞ存在しない、と愛郷心のかけらもない予言を繰り返してはせせら笑っていたが、その笑いが引きつるのももうまもなくだ（…）明日になれば口は塞がれ、鼻っ柱はへし折られるだろう」技師はバイアーナ経由でやってきて、その日の朝早くイリエウスに到着したのだった。

新聞記事は激越な調子を帯び、敵にたいする不躰な態度に充ち満ちていた。しかし、まもなく技師がやって来るといふ事実に誤りがあるわけではない。すぐにも技師がやって来ると言われ始めてからすでに三ヶ月が経っていた。ある日——フィロメーナ婆さんがい

なくなつてナシブがガブリエラに出会ったその日のことをナシブはよく覚えていた——沿岸航行船から下船したムンデイーニョ・ファルカンが自らの威信を誇示するために、港口の問題は検討され、解決されるだろうと四方八方に喧伝した。交通省の技師がすぐにでもやってきて、そうすれば問題解決への第一歩を踏み出せるはずだと。この発言は、ジェズイーノ・メンドンサ大佐の事件に劣らぬセンセーションを町に巻き起こすと同時に、翌年早々行われる選挙戦の開始も告げることになった。ムンデイーニョ・ファルカンが対立陣営の頭目になり、その後ろには一握りの支援者が控えている。紙名に「ニュースが多く、政治的偏りのない」と銘打たれた『日刊イリエウス』が、町の行政をぼろくそに言い、ラミール・バストスを攻撃し、州政府に当てこすりをし始めた。博士は世にも恐ろしい風刺文を連載し、技師来るの予告をまるで大なたのようにバストス一族の頭上に振り下ろしていた。

一階はカカオの袋が所狭しと置かれ、その二階が事務所になっていたが、その事務所ではムンデイーニョ・ファルカンが大農場主たちと話し合っていた。だが、それは取引の話でもなければ、収穫物の売却の話でも、支払い方法の話でもない。政治の話だった。同盟を誘い、プランを話し、選挙は勝つたも同然だと太鼓判を押す。バストス一族は州政府の後ろ盾を次々と受けて、二十年以上にわたりイリエウスを支配してきた。とはいえ、ムンデイーニョの方がバストス一族を上回っていた。ムンデイーニョの威信はリオに、すなわち連邦政府に発するものだったからである。その証拠に、州政府の反対があったにもかかわらず、これまで未解決に放置されていた港口の問題を調査してくれる技師を派遣させ、短期間に解決する保証を引き出したではないか？

これまで自らの票の重みなど考えもせず、ラミール・バストスにひたすら手を差し伸べてきただけのリペイリーニョ大佐が、新しい頭目の戦列に加わり、初めて政治の世界に乗り出した。熱烈な伝

道師のように奥地を歩き回り、同朋と語らい、小作人や労働者を嚮導する。この政治的友情はアナベラとのベッドから生まれたと言う者もいた。輸出業者がイリエウスに連れてきた踊り子は、最近、パートナーの奇術師を捨てて、もっぱら大佐とだけ踊っているから、と言うのである。「大佐とだけだつて? とんでもない」と、ナシブは思った。大佐が田舎町や農村を駆けずり回っているあいだ、アナベラは画に描いた政治的中立を実践しているとでもいうようにトニコ・バストスと寝ていたからだ。そして、気まぐれなムンデニーニョから連絡が来ると、いそいそと駆けつけて二人を裏切るのだつた。粗暴な風俗が残り、だれもがびくびくしているこの土地でなにか災難が起こると、アナベラが最後に頼るのはムンデニーニョだつた。

他の大農場主たち、とりわけ、ラミーロ・バストス大佐と最近約束を交わしたばかりの最若手は、抗争の時代に大佐と血判を交わしたわけではなかったから、みなムンデニーニョ・ファルカンの状況分析と解決策に賛同していた。イリエウスに今必要なのは道を拓き、アーグア・ブレータ、ピランジ、リオ・ド・ブラーソ、カシヨエイラ・ド・スルといった内陸地区発展のために収益の一部を使い、長引いているイリエウス・イタピラ間の鉄道工事を早く終えるようイギリス人たちに要求することだという点について、若い大農場主たちはムンデニーニョと意見を同じくしていたのである。

「広場と花壇はもういい。われわれに必要なのは道路だ」

若い大農場主たちはカカオを直接輸出できる展望に夢中だつた。ひとたび港口が浚渫・改修され、大型船が通行可能となれば、その展望が開ける。地元に入る収入も伸び、イリエウスは紛れもない首都になるだろう。あと数日。そうすれば技師を迎えることができる……

ところが、時ばかりがいたずらに過ぎて行つた。一週間経ち、ひと月経つても技師は来なかつた。大農場主たちの熱も冷めていっ

た。ただひとり、リベイリーニョだけが未来を信じ、バールで囁かれる否定的な意見に異議を唱え、約束したり恫喝したりしていた。バストス一族の週報『南部報知』は「よそ者の野望と悪意がでつち上げ、バールの会話にしかその威信の根拠を見いだせない幻の技師」はいつたいていどうなつたのか、と書く。一連の動きの中心人物である隊長カピテンその人にしてからが苛立ちを隠しきれず、バックギャモン台でもいらいらしてはゲームに負けていた。

ラミーロ・バストス大佐は、高齡だから旅は止めろという友人や息子たちの制止を振り切り、バイーアに赴いた。一週間後、勝利を確信して意気揚々と帰宅すると、支持者たちを家に呼んだのであつた。

州政府がラミーロ大佐に太鼓判を押してイリエウスの港口を担当する技師が大臣によつて任命された事実はないと語つたことを、アマンシオ・レアルは例の野太い声で支持者たちに繰り返した。交通省の技官がすでに大々的な調査を行つていて、その上で解決不可能という結論をだしました。手の打てる問題じゃありません。この期に及んで解決しようなんぞ、時間の無駄ですよ。解決策としては、港口の向こうのマリヤードにイリエウス用の港を新設するしかありませんが、そうなればかなりの大事業にならざるを得ない。工事にゴーサインが出るまでには数年間の調査が必要となるでしょう。莫大な費用がかかるし、連邦政府、州政府、町のあいだで緊密な連係プレーも必要です。これだけの規模の事業ともなれば、調査に長い時間がかかるのは致し方ありません。長い時間をかけて、難しい調査を色々しなければならなりませんから。でも、その調査ももう始まつております。イリエウスのみなさん、いましばらくお待ちください……

『南部報知』は港の将来について記事を掲載し、知事とラミーロ大佐を讃えた。技師については「港口で永遠に座礁し」云々と書いている。行政長官はラミーロの勧めで、広場の、ブラジル銀行の新

しい建物脇にもうひとつ花壇を作るように命じた。
アマンシオ・レアルは隊長と博士に会うたびに必ず嘲るように笑って言うのだった。

「で、技師さんはいつお出ましかな？」
博士がつっけんどんに答える。

「笑いたけりや笑え。最後に笑うのはこっちだ」
隊長が加勢する。

「待ってて損したやつはいないよ」

「でも、いつまで待てばよろしいのでしょうか？」

最後には三人一緒に飲むことになるのだが、飲み代を支払わされるのはいつも博士と隊長だった。

「もし技師が来たら、そのときはこちらが払いますよ」

アマンシオはリベイリーニヨにも同じ冗談を吹っかけようとしたが、リベイリーニヨは興奮するとボールの中で喚きだした。

「おれもケチな男じゃねえ。賭けようってんだろ？ じゃあ、モノホンの金をぼんと賭けるよ。おりゃ技師が来る方に一万クルゼイロだ」

「二万？ じゃ向こうを張ってこちらは二万クルゼイロ賭けましょう。しかも期限は一年。それともっと延ばしたいですか？」 声は柔和だが、目は意地悪そうに光っている。

ナシブとジョアン・フウジェンシオが証人を務めた。

隊長はムンデイーニヨ・ファルカンにリオへ行って大臣に陳情してくるようしつこく頼んだが、輸出業者は首を縦に振らなかった。収穫が始まった今、取引をほったらかしにして出かけるわけにはゆかない。そもそもリオまで行く必要なんかあるだろうか。技師がやって来るのは間違いないのだから。遅れているのはただ役所の事務手続きに時間がかかっているからにすぎない、と言うのである。ムンデイーニヨ・ファルカンは実際に遭遇した困難については語っていないかった。実はバイーア州知事の抗議を受けて、大臣が約束の

実現をためらっているという情報を友人の手紙で知り、ショックを受けていた。ムンデイーニヨはそこで問題の解決に向けて、自らの家族を除く友人・知人を総動員した。手紙を出し、大量の電報を打ち、お願いと約束を繰り返す。ひとりの友人が共和国大統領と話をしてくれた。そしてこれについてはムンデイーニヨの知るところにはならなかったが、窮地を脱する決め手となったのはロリヴァウとエミーリオの威信であった。陳情者の名前を見てサンパウロに大きな影響力を持つ政治家の血縁だと知った大統領が、大臣にこう語ったのである。

「結局、あれは正当な陳情だよ。州知事はもうすぐ任期切れだ。対立する人たちも多い。後継者をすぐ後釜に据えられるかどうかも分らない。いつもいつも州政府の意思ばかり尊重する必要はないんじゃないか？」

ムンデイーニヨは恐怖に戦きながら毎日を送っていた。パニックを起こしかけていたと言ってもよい。この勝負に負けたら荷物を畳んでイリエウスから出てゆくしかなかった。落胆喪心の日々を送りたくなければ、冷やかすと嘲笑の的にならなくては、頭を垂れ、膝を折って二人の兄に庇護を乞わねばならない。悪口が膨らみ始めたボールやキャバレーに、ムンデイーニヨはほとんど顔を見せなくなっていた。

ムンデイーニヨのシンパの前でもきわめて慎重に自制し続けてきたトニコ・バストスも、ついに堪えきれず、敵対者たちの不機嫌をからかうことがあった。トニコと隊長のあいだに口論が始まり、ジョアウン・フウジェンシウが割って入って関係の決裂をくい止めたことさえあった。トニコが飲んだ勢いでこんなことを言ったのである。

「ムンデイーニヨは技師の代わりに踊り子をもうひとり連れて来たらどうなんだ？ 踊り子の方が少ない働きで、友人たちに供するものは多いがなあ……」

その夜、隊長は連絡もせず突然輸出業者の家を訪問した。ムン
 デーニーニヨは気が進まない訪問を受けて言った。

「隊長、申し訳ないが、今日は先客がいるんだ。バイーアから
 やつてきた若い娘で、今日着いたばかりなんだよ。取引の疲れを癒
 そうと思つてね…」

「ほんの少しでいいんだ、耳を貸してくれ」バイーアから送られ
 てきた娼婦という話に隊長は苛立ちながら言った。「トニコ・バス
 トスが今日バルで何と言つたか知つてるか？ あんたがイリエウ
 スに連れて来るのは女ばかりだつて。女以外はゼロ：技師なんか問
 題外だつて」

「そりゃ面白い」と言つてムンデーニーニヨは笑つた。「だが、そ
 うやきもきしなさんな」

「これがやきもきせずいられるかつて。待てど暮らせど技師は
 やつてこないし…」

「隊長、言いたいことはもう分かつた。おれが馬鹿だと思つてい
 るんだらう。手をこまねいたまま事態を見過ごして」と

「なぜご兄弟に相談しないんだ？ あれほど力があるつていうの
 に…」

「それだけは御免被る。その必要もないし。今日、最後通告を
 送つておいた。安心して帰つてくれ。こんなもてなしで申し訳な
 かつたが」

「こちらこそ邪魔して申し訳なかつた」部屋の中を歩く女の登音
 が聞こえてきた。

「じゃあ、トニコに聞いていってくれ。女はブロンドがいいか、小
 麦色がいいか…」

その数日後、技師の名前と技師がバイーアに向けて乗船する日に
 ちの書かれた電報が大臣から届いた。ムンデーニーニヨは隊長とリ
 ベイリーニヨ大佐と博士を呼びにやつた。「任命技師 ロームロ・
 ヴィエイラ」隊長は電報を掴むと立ち上がった。

「これをトニコとアマンシオの鼻の穴に突っ込んでくらあ…」

「努力せずして札二十束せしめたぞ」リベイリーニヨは諸手を上
 げて言った。「バタ克蘭でひとつドーンと馬鹿騒ぎしようじゃな
 いの」

ムンデーニーニヨは電報を取り上げると、隊長に渡さなかつた。そ
 れどころか、この話はもう数日秘密にしておいてくれ、と言う。技
 師がバイーアに到着してから新聞で公表した方がずっと効果的だか
 ら、と。実は、ムンデーニーニヨが恐れていたのは州政府の攻撃だつ
 た。大臣がまた及び腰になつてしまうのではないかと考えたのであ
 る。ムンデーニーニヨが新たに一回を招集したのは、技師がすでに
 バイーアに到着して、次のバイーアノ号でイリエウスに行く予定を
 知らせてきてから一週間も後のことであつた。ムンデーニーニヨは届
 いた手紙や電報を見せ、州政府との戦いがいかに辛く難かつたか
 語つた。友人たちに余計な不安を与えなかつたのでこれまで詳
 細は一切公表しなかつたが、技師がやつてきた今こそすべてを事細
 かに知らせよう、この勝利の価値を伝えるべき時だ、と。

バール・ヴェズーヴィオではリベイリーニヨが全員に飲み物を振
 る舞い、上機嫌の隊長が杯を高く掲げ、「イリエウスの港口の救済
 者ロームロ・ヴィエイラ博士」の健康を祝して乾杯の音頭を取つ
 た。ニュースはあちらこちらに広まり、次いで新聞で取り上げら
 れ、多くの大農場主に熱狂が帰つてきた。リベイリーニヨ、隊長、
 博士は手紙の一節を引用してはあちらこちらに語つて回つた。曰
 く、州政府は技師の派遣を阻止するためならなんでもやつた。その
 持てる威信と力をすべて注ぎ込んできた。知事は娘婿のためとい
 う個人的な理由のためにやつきになつた。その結果、だれが勝つ
 たか？ 州政府を掌中にした知事か？ それともムンデーニーニヨ・
 ファルカンか？ ムンデーニーニヨの個人的な威信が州政府に勝つた
 のだ。これは一目瞭然、だれにも明かな事実である、云々。感銘を
 受けた大農場主たちは深くうなずいていた。

港のレセプションはお祭り騒ぎだった。すかり寝坊癖のついたナシブはこの日も起きるのが遅かったので、レセプションに立ち合うことはできなかったが、ボールに入るとすぐにニョー・ガールの口から全てを聞き出すことができた。船橋のレセプションにはムンディー・ニョ・ファルカン、その友人たち、かなりの数の大農場主、そして物見高い有象無象が集まっていた。神がかった存在にまで祭り上げられていた技師がいったいどんな姿をしているのかだれもが一目見たがり、あちこちで囁き合っていた。果ては、クローヴィス・コスタが雇った写真家まで現れる始末。技師を中心にして全員を集め、自らは黒布を被って、撮影に半時間はかけた。ところが、残念なことにはこの歴史的記録は残らなかった。露出オーバーで感光板が焼けてしまったのである。写真屋はスタジオでしか撮影したことがなかったのだ。

「いつお始めになるんですか？」とナシブが訊く。

「すぐにでも開始しますよ。まずは予備調査です。ただ、それには機材の到着を待たねばなりません。ロイド船で今こちらに急行しているところです」

「長くかかるんですかね？」

「はつきりしたことは申し上げにくいんですが、ひと月半かふた月か、まあそんなところじゃないかと……」

今度は技師の方が興味を持って尋ねた。

「浜辺がきれいですな。海水浴にはいい所でしょう？」

「そりゃ、もつてこいですよ」

「でも、だれもいませんが……」

「ここいらじゃ習慣がないんです。海水浴をするのはムンディー・ニョだけでしてね。以前は亡くなったオズムンドもしてましたけど。殺された歯科医ですが……早朝海水浴を」

技師は笑う。

「でも禁止されてるわけじゃないんでしょう？」

「禁止？ いやいや。ただ習慣がないだけです」

祝日の休みを利用して買い物を楽しんでいた修道女学校の生徒たちが、キャンディーやキャラメルを買いにボールに入ってきた。カマルヴィーナもいる。隊長が女生徒たちを紹介した。

「若き学徒、未来の良き母親です。イラセーマ、エロイーザ、ズレイカ、マルヴィーナ……」

技師は握手を交わし、微笑み、お世辞を言う。

「別嬪さんの土地柄ですな……」

「ずいぶんお待ち申し上げておりましたわ」と神秘的な視線をじつと注ぎながらマルヴィーナが言った。「もういらっしやらないんじゃないかとみなさん諦めかけていたところです」。

「こんなに美しいお嬢さん方に待たれていると分かってたら、もっと早く来てたんですがねえ。任命されなくても……」この娘はなんとという目をしてきているわけではなさそうだ。どうやら内面から発されるものらしい。

陽気な女学生グループは帰っていった。途中マルヴィーナは二度振り返った。技師が言う。

「せつかくですので海水浴をしまいます」。

「食前酒の時間にはお戻りください。十一時か十一時半といったころでしょうか……今度はイリエウスのもっと良いところをご紹介しますよ……」

技師はホテル・コエーリヨに投宿していた。宿泊客はこのすぐ後で、バスローブを羽織って浜辺へ向かう技師の姿を目にした。客たちは立ち上がって、バスローブを脱ぐ技師の姿を覗き見ようとする。海水パンツだけしか穿いていない運動選手のような体が海に駆け込み、勢いよく波をかき分けるてゆくとところが見えた。マルヴィーナは浜辺の散歩道にあるベンチに腰掛け、技師の姿をじつと見つめていた。

アラブ人ナシブの心はどのように乱れ始めたか

ナシブはサン・フェリックスの葉巻の香り立つ煙を吸い込むと新聞を数行読んだ。ふつう、バイーアの日刊紙に書かれた大概のことは葉巻を最後まで吸い切る間もなく読み終えてしまう。ガブリエラが無類の味付けを施したご馳走をがつと大食したため胃に負担がかかっているナシブは、海からの微風に揺すられると、すぐ眠りに落ちる。豊かな口ひげのあいだからは幸せそうな酩酊が聞こえてくるのだった。こうして木陰で取る昼寝の半時間は、不安もめ事も重大問題もない静かで幸せなナシブの人生にとって、最高に甘美なひとときである。こんなに商売がうまくいったことはかつてなかった。バールの客足はますます繁くなり、銀行には貯金がますます増えてゆく。カカオを植える土地を買い取ったという夢もかなり現実味を帯びてきた。ガブリエラを雇えたことは、「奴隷市場」でかつて経験したことのない有利な取引であった。女がこんなに有能な料理人だなんて、ほろの下にこんな魅力と美しさが、こんなに熱い肉体が、こんなにかわいらしい腕が、頭がくらくらするほどの丁字の香りが隠されているなんて、だれが想像できたろう！

技師が到着したその日、好奇心がバールを支配していた。紹介と挨拶と尽きせぬ称賛が交わされ——「先生は第一級の泳ぎ手ではないらしいですなあ」——イリエウスじゅうの昼食が遅れたほどであった。技師がやってくるという知らせを耳にしてから、ナシブは一日また一日と過ぎてゆく月日を数えていた。家に帰る前、ガブリエラが訊ねたことがある。

「今日、映画に行つていいですか？ アルミンダさんのおつき合いで……」

ナシブはレジから五ミルレイス札を出すと気前よく言った。

「アルミンダさんの分も払つてあげなさい」

ガブリエラが顔を真っ赤にして笑いながら（ナシブは食事の最中もまだガブリエラをつついたり、触ったりしていた）出てゆくところを見送りながらも、頭のなかでは流れた日々を計算していた。きつかり三ヶ月と十八日。ムンデイーニョとその友人たち、ラミール・バストス大佐とその朋友たちにとって、それは不安、ひそひそ話、疑念、希望に満ちた日々だった。新聞には侮辱の言葉が踊り、秘密の会話、賭、口げんか、隠然たる脅迫が交わされ、ぎすぎすした雰囲気嵩じていった。バールが爆発寸前のボイラーさながらになったことさえある。そのころの隊長はトニコとほとんど口をきかず、アマンシオ・レアル大佐とリベリーニョ大佐はろくろく挨拶すら交わさなかった。

他人にとってこの数ヶ月はまさにこのような日々だった。ところがこの同じ日々がナシブにとっては静かで明るく穏やかな日々だった。ナシブの心はすっかり落ち着いていた。おそらく生涯において最も幸福な日々だったに違いない。

これほど穏やかな昼寝もかつてなかった。昼食が済むと消化のために苦味酒を少しだけ飲み必ずやってくるトニコの朗らかな声で目が覚める。トニコとしては登記所を再開するまえに少しでもしゃべりしてゆこうという算段だった。しばらくすると、文具店に行く途中で立ち寄るジョアン・フルジェンシオがそこに加わる。イリエウスと世界のことを話題に上る。書籍を扱うこの男は世界の出来事を通じており、一方のトニコは町の女のことならすべてを知っていた。

三ヶ月と十八日かかって技師はやってきた。それはガブリエラを雇つてから流れた月日と正確に同じだった。あの日、ジェズイーノ・メンドンサ大佐がドナ・シニャジーニャと歯科医オズムンドを殺した。だが、ガブリエラに料理の才能があることを確信したのはまさにその翌日であった。デッキチエアに横たわり、新聞を地面に落として葉巻の火を消すと、ナシブは微笑みながら思い出していた

：あの娘の料理を食べ始めてから三ヶ月と十八日か。イリエウスにはこんな腕の良い料理人女はどこ探してもいないだろう。あれは二日目の晩からだから、あの娘とはもう三ヶ月と十六日一緒に寝たわけだ。あの晩、月明かりがあの娘の脚を照らしていたつけ。部屋の暗がりのなかで、破れたスリッパから片方の乳房がこぼれ出て：

その日の午後、ボールの混み方が尋常でなかったせい、あるいは技師がやってきたことに神経が興奮していたせい、ナシブはなかなか寝付くことができず、あれこれ考え事をしていった。ナシブは当初、北東部の干魘を逃れてやってきた移民娘が作る料理も、夜になると熱く燃えるその肉体も、あまり重要視していなかった。料理の味付けとバリエーションに満足しながらも、店の客足が繁くなり、つまみと甘味の数を増やさざるをえなくなつて、その結果、来る客来る客みんなから料理の賛辞を受けるようになるまで、さらには最悪のやり方で商売をしているプリーニオ・アラサーがガブリエラに仕事のオフアをしてくるようになるまで、そのしかるべき価値に気が付かなかった。ガブリエラの肉体に対しても——ベッドで燃え尽くすあの愛の炎にも、朝まで一睡もせずに練り広げる狂気の宴にも——ナシブの執着心は無自覚なままだった。最初のころ、ガブリエラとことに及ぶのは、疲れてもいなければ眠くもないのにリゾレータの体が空いていなかったり病気だったりして帰宅せざるをえない晩に限られていた。他にすることもないからガブリエラと寝よう、というわけである。だが、そんな無頓着も長続きしなかった。ナシブはたちまちガブリエラの料理に馴染み、ニョーIIガロの誕生日の夕食会に招かれたときにも、ちよこつと味見をしただけでガブリエラの料理との違いに食べる気さえ失せてしまった。その一方で、知らず知らずのうち庭に面した小部屋に通う頻度が増し、手練れの娼婦リゾレータのことは忘れていった。リゾレータの上辺だけの優しさ、抜け目のなさ、いつもの愁嘆ばかりか熟達の愛技にまで、金を巻き上げてやろうという魂胆を感じてうんざりしていた

のである。ついにリゾレータには会わなくなり、送ってくる手紙にも返事をしなくなった。それからの約ふた月というものの、女はガブリエラひとりであった。今ではできるだけ早く店から帰宅するように努め、每晚部屋にガブリエラを訪ねていた。

幸せなひととき、人生の明るい日々だった。肉体は満たされ、テーブルには滋養たっぷりの美味しい料理が並ぶ。心は満ち足り、ベッドでは幸運をかみしめていた。昼寝の時間にナシブが頭の中で作るガブリエラの美德一覧表には、仕事への愛と経済観念も含まれていた。服を洗い、家を片づけ——こんなに家の中がきれいだったことはかつてなかった——ボールのための料理を盆に載せ、ナシブの昼食と夕食を作る時間と余力をどうやって見つけてくるのだろう。それなのに夜になると疲れを知らぬはつらつとした体は欲望に濡れ、受け身でナシブを迎えるどころか、自ら飛びついて、飽くことも眠ることも満たされることも知らないのだ。まるでナシブの考えを予測していたかのように意図を先取りし、ナシブを驚かせることがある。いくつかの手の込んだ料理——蟹を入れたタピオカのおかゆ、鶏肉や魚をココナツミルクで煮込みデンデヤシで味付けしたヴァタパー、詰め物をした羊料理ヴィユーヴァ・デ・カルネイラ——はナシブのお気に入りだったし、玄関の小テーブルに置かれたナシブの写真の横に一輪挿しを置いてくれたのはガブリエラだった。市で買物をするための小銭を用意してくれたり、ボールに手伝いに行くというアイデアを出してくれたのもガブリエラだった。以前はシコ・モレーザが昼食から戻るときにフィロメーナの用意した弁当をナシブに持ってきていた。腹ぺこのナシブは今や遅しと弁当を待ちながら、ピコIIフィーノと二人きりで、食前酒を楽しむ最後の客に給仕をしていた。ところがある日、予告もなしに突然ガブリエラが弁当を持って店にやってきた。ドナ・アルミンダがぜひというので交霊会に行かせて欲しいと言いに来たのである。そしてそのままナシブの手伝いをして帰ったが、その日からガブリエラ

は毎日店に来るようになった。その晩、ガブリエラはナシブにこう言った。

「あたしが旦那さんにお食事を持っていった方がいいと思うんです。そうすれば旦那さんは早く食べられるし、あたしはお手伝いできるし。いかがですか？」

ガブリエラの存在が客にとってさらにもうひとつの魅力になるのだから、「いかが」もなにもあるだろうか？ まもなくしてナシブは気づいた。客が長居をして、もう一杯注文をするようになり、めったにこない客も常連になって毎日やってくるようになったのである。ガブリエラに会って話しかけ、微笑み、手を握るためであった。ナシブにとってみれば結局それは「いかが」もなにもなかった。ガブリエラはただの料理女であって、同衾に契約はいっさいない。料理をしてくれ、デッキチェアを用意してくれて、そこにバラの花と香りを残しておいてくれるのだ。ナシブはこの暮らしにすっかり満足して葉巻に火を付け、新聞を手にとって、天なる主の安らぎのなかで眠り込むのだった。海からの微風が豊かに茂った口ひげを撫でてゆく。

ところがその日の昼下がり、ナシブはどうしても眠れなかった。町にとつては波乱に満ちた、だがナシブ自身にとつては平穏だったこの三ヶ月と十八日の収支決算表を頭のなかで組み立ててみた。できるなら十分でもうとうとしたのだが、結局、たいして意味のない個人的な思い出に耽るしかなかったのである。そのときふと何かが足りない感じに襲われた。おそらくそのために寝付けなかったのだろう。足りないものはバラだった。デッキチェアのくぼみには午後になると決まってバラの花が置いてあった。ところがその日、司法区判事が、その職務の人間が保つべき品位をかなぐり捨てて、ガブリエラの耳からバラの花を盗むと、自らの服のボタンホールに挿すところをナシブは目にしてしまった。五十代の立派な大人が、技師を囲むてんやわんやの大騒ぎに乗じてバラを盗んだのだ。しか

も男は判事：ガブリエラがどうするか心配だったが、気づいてさえないようだった。この判事は近ごろいやになれなく、夕方に時折ジョアン・フルジェンシオとマウリーシオ博士と連れ立って姿を現すだけだった。ところが今では慎みをかなぐり捨て、来られるときになれば必ずボールにやってきて、ポルト酒を飲みながらガブリエラの周りをうろうろしている。

ガブリエラの周りをうろうろ：ナシブはしばらく頭を巡らした。周りをうろうろ：そうか。すぐにピンと来た。周りをうろうろしているのは判事だけではなかったのだ。考えてみればどの客も：家庭に問題を持ち込んでまで、みな昼食時間を過ぎて店に居残っているのはなぜだろう？ ガブリエラに会い、笑いかけ、ちよっかいを出し、手に触れ、仕事の話を持ちかけるためではないだろうか？ 仕事の話といつても、ナシブが知っているのはプリーニオ・アラサーが持ちかけたものだけだった。だが、関心はあきらかに直接料理女に向けられていた。黄金のピンガの顧客がボール・ヴェズーヴィオに鞍替えしてしまったので、プリーニオはガブリエラにもっと高い給料を出すから来ないかと持ちかけたのである。ただ、メッセンジャーの選定がまずかった。ボール・ヴェズーヴィオの忠僕にしてナシブに忠義なちびくろトウイスカに伝言を託してしまったのである。というわけで、ガブリエラに用件を伝えたのは他ならぬアラブ人本人ということになった。ガブリエラは笑って言った。

「他に行く気なんかありません：旦那さんにつまみ出されないうぎり…」

夜だった。ナシブはガブリエラを腕に掻き抱き、熱い体で包み込んだ。そして給料を十ミルレイスにすると言った。

「そんなことお願いしてないのに…」と女は言った。

ナシブはときどきガブリエラに安物のイヤリングやブローチを土産に買ってくるのがあった。そのうちのいくつかはおじの店から

持つてきたものでタダ同然だった。それを夜持つてゆくと、ガブリエラはほろりとして感謝の言葉を神妙な面もちで口にすると、東洋式の仕草でナシブの掌に接吻するのだった。

「やさしいのね、ナシブさんて……」

千レイスのブローチ、千五百レイスのイヤリングが、愛の夜、囁き、失神するほどの恍惚、消えることなく燃え続ける炎にたいする感謝のしるしだった。粗悪な反物を二度、スリッパを一度プレゼントしたが、ガブリエラの濃やかな気配り、ナシブ好みの料理、フルーツジュース、丁寧にアイロンをかけた白いワイシャツ、髪から抜いてデッキチエアに置いてくれるバラにたいしてナシブがしたことといえ、これがすべてだった。ナシブはまるで王様が報酬を与えように賃金を支払い、特別の寵愛を注ぐように寝た。要するに、遙かな高みからガブリエラを扱っていたのである。

ボールではガブリエラに言い寄る者が出てきた。聖セバステイアン坂でも、伝言を渡してながしかの申し出をする者はおそらくいたに違いない。ただ、全員がメッセンジャーにトウイスカを使ったわけではないので、ナシブには把握のしようがなかった。ガブリエラを誘惑する以外に司法区判事がボールにやってくる目的などあったらどうか？ 判事は、田舎から出てきた妻の若いムラターが、性の悪い病気に罹ったために捨てたばかりであった。

ガブリエラがボールに来始めたころ、ナシブは——なんたる間抜けだ！——単純に喜んでいた。増えてゆく実入りにばかり気を取られ、毎日繰り返される誘惑の危険には思いが至らなかつたのである。ガブリエラを店に来させないなど思いもよらなかつた。金儲けを放棄するようなものだ。だが、ナシブはガブリエラから目を離さず、もつと気を配つてやるべきだったのだ。もつとよい贈り物を買つてやり、この先も給料をアップすると約束すべきだったのだ。イリエウスに腕の良い料理女はめつたにいない。そのことはナシブ自身がだれよりもよく知つていた。多くの裕福な家やボールの主

人、ホテルの所有者にとつてナシブの使用人は垂涎的だ。法外な給料を出してまで手に入れたと思う者もいるに違いない。それにガブリエラがつまみと甘味を作つてくれなくなつたら、ガブリエラが毎日昼時にやつてきて微笑んでくれなくなつたら、どうやつてボールを續けてゆけるというのだろう。ガブリエラが昼食と夕食を作つてくれなくなつたら、あの香り高い料理、ぴりつと辛みの効いたソース、毎朝のコーンミールを作つてくれなくなつたらどうして生きてゆけるだろうか。

ガブリエラなしでどうやつて生きてゆけるだろうか？ あのおおずおずとした明るい笑い声、あの肉桂色をした熱い肌、あのくつろいだようす、あの「すてきな旦那さま」と言うときの声、あの腕のなかで迎える小さな死、あの熱い乳房、あの火照つた脚なしで、どうやつて？ ナシブはそのとき、ガブリエラが意味するすべてを理解した。ああ、神様！ 何が起こつたんだらう？ あの娘を失うことが突然なぜこんなに怖くなつたんだらう？ なぜ海の涼風がおれの太つた体を凍らせるほど冷たく感じられるんだ？ ああ、あの娘を失うなんて考えることさえできない。あの娘なしでどうやつて生きてゆけというんだ？

ぜつたいにほかの料理を楽しむことなんかできないだらう。ほかの人の手で味付された料理なんか。ほかの女をこんなに強く求めることなんか、こんなに切迫して、こんなにいつまでも欲しいと思ふことなんか、ぜつたいに、ぜつたいに無理だらう。たとえそれがガブリエラより色白で、おしゃれで、完璧で、金持ちで、立派な家に嫁いだ女だとしても。あの娘を失うのではないかというこの恐れは、この恐怖心はいつたいなんなのか？ ガブリエラをじつと見つめ、あれこれと喋りかけ、手を握る客たちをたいして、職務に見合つた敬意をかなぐり捨てて花を盗む判事にたいして、なぜ突然、激しい憎悪を抱くようになったのか？ 不安になつたナシブは自らに問うてみた。結局、おれはガブリエラのことをどう考えているの

だろう？ たんなる料理女、肉桂色の肌をしたかわいいムラータで、ただ寝たいから寝るといっただけのことなのか？ それともそんなに単純な話ではないのか？ しかし、ナシブはそれ以上答えを追求する気にはなれなかった。

トニコ・バストスの声が——トニコはため息をつきながら「よかったじゃないか」と言った——こうした漠たる不安に満ちた考えからナシブを引き離してくれた。ところが、今度はもつと激しい不安のなかにナシブを沈めたのである。

というのも、カウンターにもたれ掛かるやいなや勝手に苦味酒を注ぐトニコに、ナシブが憂さを晴らそうとして、「例の男がついに来たよ……これでムンディーニョが一本取ったな、間違いない」と言うと、トニコが陰気な視線を投げかけてこう言ったのである。

「トルコ人さんよ、あんた他人のお節介はいいから自分のこと考えなつて。これは友人としての忠告だ。くだらないことほざいてないで自分のやることさちつとやったらどうだい？」

トニコは技師の話を避けたいだけなのか、それともなにか知っていることがあるんだらうか？

「それってどういう意味だい？」

「お宝に気をつけなつてことよ。盗もうつて輩がいるからな」

「お宝って？」

「ばかだなあ、ガブリエラに決まってるだらう。あの娘のために家まで用意してる奴がいるんだよ」

「判事のことか？」

「なに、あいつも？ おれが聞いたのはマヌエル・ダス・オンサスの噂だけだ」

トニコの陰謀だらうか？ 老大佐は圧倒的にムンディーニョ側の人間だ。だが、たしかに近ごろしょっちゅうイリエウスで姿を見かけるし、ボールに入り浸っている。ナシブは身震いした。この冷たい風は本当に海から吹いてきた風だらうか？ カウンターの陰で

生一本のコニヤック瓶を掴むと、グラスにたっぷり注ぎ、ぐいっと呼んだ。トニコからもつと話を聞き出したかったが、公証人はイリエウスを罵り始めた。

「この土地やあ糞食らえだ。技師がひとり来たくらいで町中大騒ぎしやがってよ。宇宙人でも来たみたい……」

会話、事件、焚書

まるでガブリエラがすでになくなってしまったかのように、ガブリエラの出発がもはや避けられないかのように、午後いっぱい、ナシブの胸はノスタルジーに取り憑かれていた。そうだ、プレゼントを買ってやろう。あの娘には靴が必要だ。家のなかではどこを歩くのも裸足で、サンダルを履くのはボールに来るときだけだ。あれじゃあ良くない。ナシブはいちど「靴を買いなさい」と注意したことがある。ベッドの上でじゃれながら、足をくすぐっているときだった。裸足で野良仕事をする習慣にもかかわらず、また、奥地から長いあいだ裸足で歩いてきたにもかかわらず、足は少しも変形していなかった。おそらく三六くらいのサイズだらう。足の指は普通より少し広がっていて、かわいい親指が横ざまにくっついている。こうしたことをひとつひとつ思い出しながら、まるで失ってしまった人を思い出すように、ナシブは慕情と郷愁に浸った。

きれいだと思つて買った黄色の靴を箱に入れ、箱を小脇に抱えて歩いてくると、モデーロ書店で議論が沸騰していることに気づいた。無視できなかつた。いや、どうしても気晴らしを必要としていたのかもしれない。ナシブは書店に向かった。カウンター前に置かれた数少ない椅子は全部ふさがっていて、立っている者もいる。ナシブは体の奥底から、定かならぬ明かりのように好奇心が沸き上がってくるのを感じた。きっと技師について話しているんだらう。政治抗争について予想を立てているのかもしれない。歩を早めた。

エゼキエル・プランド博士が腕を振り上げている。店に入ると、博士の言葉尻が耳に入った。

「…社会と住民にたいする敬意が欠けておる…」

奇妙だ。技師の話ではない。どうやら、妻と歯科医を殺していらぬ農場に引きこもっていたジェズイーノ・メンドンサ大佐が突然町に戻ってきたことを話題にしているらしい。弁護士はこの少し前に行政長官の家を訪ね、ラミーロ・バストス大佐の家にも入りこんでいたようだ。この帰還がイリエウスの自尊心をいたく傷つけるものだと言ふ。弁護士は考え、声高に抗議しているところだった。ジョアン・フルジェンシオは笑って言った。

「でもなあ、エゼキエル。住民の自尊心がどうのつたつて、殺人者が町中を自由に闊歩するのは昨日今日に始まった話じゃないだろう？ もし殺人を犯した大旦那たちがみんな農場で暮らさなきゃならなくなったら、イリエウスの街はすっからかんになっちゃうよ。キャバレーもバルも店じまいだな。ここに居るわれらが友人ナシブ君なんてもう被害甚大」

弁護士は納得しなかった。もつとも、納得しないことがエゼキエルの仕事だった。オズムンドの父親からジェズイーノを訴えるよう依頼されていたからである。父親は検事を信用していなかった。不倫による殺人というこの種の事件では、検事は被告をきわめて形式的に訴えるに過ぎない。

裕福な商人で、バイーアの有力者たちとコネのあるオズムンドの父親は、一週間のあいだイリエウスを揺さぶり続けた。埋葬の二日後、父親はきちんと喪服を着たまま船から飛び降りた。この長男が大好きだった。さきごろ学業を終えた長男のために盛大な卒業パーティーもしてやった。やるせない気持ちでいる息子の母親を医者に託すと、息子を殺した男がのうのうとしていらぬよう、あらゆる手づるを使うつもりで単身イリエウスに乗り込んだ。こうしたことがまもなく町でも知れわたり、喪の悲しみに暮れた父親のドラマ

チックな姿は、多くの人の心を揺さぶることになった。そして奇妙な出来事が起こったのである。オズムンドの埋葬にはほとんど人が来ていなかった。棺の取っ手を持つ手が足りないほど。そこで父親が打った最初の手は、息子の墓参りを催行するというものだった。合唱隊を雇い、墓を花で埋め尽くし、イタプーナからプロテスタントの牧師を呼び、オズムンドにながしかの関わりがあった人をひとりひとり訪ねて墓参りに招待した。帽子を手に、ドス・レイス姉妹の家の扉まで叩いた。涙も涸れた姉妹の目には苦痛が表れていた。キンキーナは気も狂わんばかりの歯痛に襲われた恐ろしい夜、助けを求めて歯科医に駆け込んだことがあったのである。

客間で二人の老嬢に相対すると、商人はオズムンドの幼いころの思い出話や勉強熱心だった学生時代について話し、息子の母親は、かわいそうに、生きる希望を失って気違いのように部屋の中をうろろろしている、と語った。最後には三人とも涙に暮れた。立ち聞きしていた使用人の老婆もドアをはさんだ廊下でもらい泣きをする。ドス・レイス姉妹はキリスト生誕群像を披露すると、歯科医を誉めた。

「善良な若者でした。とても繊細な方で」

埋葬のときは反対に、墓所への巡礼が大成功を収めたことは言うまでもない。商人たち、ルイ・バルボーザ文学会のメンバー全員、発展クラブの役員たち、ジョズエー先生等等など、多くの人々が参列した。ドス・レイス姉妹もそのなかに交じり、それぞれが小さなブーケを持ってつんと取り澄ましている。プロテスタントの墓にお参りすることが罪にならないか、二人はバジリーオ神父にあらかじめ相談していた。

「死者のために祈らないことの方が罪になります…」と神父は急いで答えた。

実は、瘦せて神秘的な雰囲気漂わせたセシーリオ神父は二人にその行為を許さなかった。それを知ったバジリーオ神父はこう説明

した。

「セシリーオはうぬぼれ屋で、天の歓びより地獄の苦痛の方が好きな男だから。ご心配召さるな、わが娘たちよ。わたしが許可する」

悲嘆に暮れながらも積極的に動き回る父親を囲んでエゼキエル博士、隊長、ニョーリガール、そしてムンディーニョ・ファルカンまでがいた。考えてみれば、ムンディーニョは歯科医と海水浴仲間である。埋葬のときにはなかった花輪が置いてあった。かつては棺に拒まれた花も今は溢れんばかりに飾られている。墓穴を覆う大理石の墓石にはオズムンドの氏名・生没年とともに、犯罪が忘れ去られぬよう、「卑劣な殺害により死去」の文字が深々と刻まれていた。

エゼキエル博士はすでに事件の訴訟手続きに入っていた。大農場主を予防収監するよう要請したが、判事はこれを拒否。博士はまだ判決が出ていないバイーアの法廷に上訴した。風の噂によれば、大佐を刑務所におち込むことに成功したら五千万レアル(ひと財産である)出すとオズムンドの父親はエゼキエル博士に約束したらしい。

ジェズイーノ・メンドンサの話はあまり続かなかつた。その日のセンセーショナルな話題は、なんとといっても技師である。高額の報酬に裏打ちされた憤りを聴衆にじゅうぶん伝えきることができなかつたエゼキエルは、最後に、港口の一件とその落着きについての会話に加わった。

「よくやつたよ。あの老いぼれ殺し屋どもをぎゃふんと言わせてやつたんだから」

「おいおいあんたもムンディーニョ・ファルカンの支持者じゃなからうな?」とジョアン・フルジェンシオが訊く。

「支持者でなにが悪い?」と弁護士が答える。「気が遠くなるほど長いあいだバストス一族につき合ってきた。やつらのためにあれこれ弁護もした。で、その見返りはなんだ? 評議員になれたってか? やつらがいてもいなくても、おれは好きなだけ評議員になれ

るよ。市評議会の議長だつて、やつらが推したのはメルク・タヴァレスだ。お墨付きの文盲よ。本命はおれつてとつくに決まつたのにさ」

「おっしゃるとおりです」とニョーリガールが鼻にかかつた声で言う。「ムンディーニョ・ファルカンはやつらと心構えが違う。あの人が政権に入ったら、イリエウスはずいぶん変わるでしょう。もしわたしが有力者だつたら、ムンディーニョ側に与しますね」

ナシブが割り込んだ。

「技師は感じの良い方でした。スポーツマンタイプと言うんでしようか。技師というより映画監督といった感じで;ありや若い子がわんさと振り返りますね;」

「妻帯者だよ」とジョアン・フルジェンシオ。

「いや、別れました」とニョーリガールが補足する。

技師のそんなに細かいことまでなぜ知っているのか、ジョアン・フルジェンシオが説明する。昼食後、隊長が技師を書店にお連れしたとき技師自身がそう言っていた。奥さんは気が違つて、今は療養所にいるらしい。

「今だれがムンディーニョと話し合っているか、みなさん、ご存じですか?」大声で『日刊イリエウス』を売り歩くちびくろたちがやつて来るのを今や遅しと待ちわびて、それまで黙つて通りに目を遣つていたクローヴィス・コスタが口を開いた。

「だれだい?」

「アルテイーノ・ブランダン大佐ですよ;今年の収穫はムンディーニョに売るようです。交渉次第では、ひよつとすると票田も;」とここで声の調子を変えて、「新聞の販売はどうして始まらないんだらう?」と言う。

リオ・ド・ブラソのブランダン大佐;このあたりではミザエル大佐に次ぐ大農場主である。地元の票をすべて押さえているため、政治家にとつては切り札であつた。

クローヴィス・コスタの言に偽りはなかった。ムンデイーニョの事務所では、拍車のついた長靴を履いたアルティノ・ブランドン大佐が、柔らかな革製の安楽椅子に深々と腰掛け、輸出業者の注ぐフランス産リキュールに舌鼓を打っていた。

「さてとムンデイーニョさん、今年のカカオは見ものですよ。なにはともあれ農園にお越しただかねば。わが家に数日お泊まりいただいで。茅屋ぼうおくですが、ご来駕の栄光を賜った暁には、神のご加護により、ひもじい思いはさせません。まずは畑を見ていただいで。カカオがたわわに実つて、さらさら輝いておりますぞ。ちょうど収穫を始めたところでして：あのカカオの実を眺めておると実に楽しい気分になるものですよなあ」

輸出業者は大農場主の足をポンと叩いた。

「では、ご招待お受けいたします。いずれかの日曜日、大佐にくつついて伺わせていただくことに：」

「土曜日においでください。日曜は百姓たちがお休みなので。月曜にお帰りになればよろしいじゃないですか。わが家をご自由に使つていただいて：もちろん、よろしければの話ですが」

「了解いたしました。では土曜日に伺わせていただきます。やつと自由に外出できるようにになりましたから。例の技師がついに町に参りましてね、てんやわんやの大騒ぎでこここのところ事務所に釘付けになつていたもんですから」

「例の青年が来町したとは聞きましたが、そりや間違いないんですな？」

「ほんとうに本当の話です、大佐。港口の仕事は明日にも始まります。じき、お宅の農園のカカオが直接ヨーロッパや合衆国に輸出されるところを目にできますよ：」

「そうですね：それは驚きです：」、と言つてリキュールを一口啜ると、窺うような目でムンデイーニョを盗み見る。「この火酒カシヤサは特級。高級品ですな。地元のものじゃないでしょう？」と訊ねるが、

返事がないので先を続けた。「なんでも選挙に出馬なさるとか。つい最近そんな噂を小耳にはさみましてな。耳を疑つておるんですが」

「疑つておいでとは、なぜ？」ムンデイーニョは老大佐がいよいよこの話題に移つてくれたことに満足していた。「その資格がないということでしょうか？ わたしに対する大佐の評価はそんなに低いですか？」

「このわしが？ ムンデイーニョさんに低い評価を？ とんでもない。ムンデイーニョさんのことはどのだれよりも高く評価しておりますよ。ただ：」、と一呼吸置き、カシヤサのグラスを明かりに透かして、「このカシヤサのように、ムンデイーニョさんは地元出身の方ではない：」、と言いながら目を上げ、ムンデイーニョを覗き込んだ。

輸出業者は首を振つた。この種の主張は新しいものではない。すでに慣れつこになつていて、反論も習慣化していた。頭の体操をするようなようなものだ。

「大佐はここのお生まれですか？」

「わしですか？ セルジペ州の出身です。地元のごろつきどもに言わせればわしは『馬泥棒』だそうで」、と言いながら陽の光にきらめくクリスタルグラスを吟味しながら続ける。「ただ、イリエウスに来てから四十年以上経つとります」

「わたしの方は四年、せいぜい五年足らずですが、大佐と同じ紛れもないイリエウス人です。生涯この土地を離れるつもりはありません：」

ムンデイーニョは、自分が地元といかなる利害を共有し、どんな事業に手を染めたのか、あるいは染めようとしているのか、あれこれ例を出しながら主張を展開し、最後に、港口の問題と技師の来町で話を締めくくつた。

大農場主はトウモロコシの葉巻と紙巻きタバコを巻きながら耳を

かたむけ、ときおり、誠実さを推し量るようにムンデイーニョ表情をじつと見つめている。

「ムンデイーニョさんはたいした方ですよ：他にもここにやってきた人たちはおりますが、どいつもこいつも目的は金儲けだけだった。その他のことなどまったく頭にありやしません。ところがあなたにはあらゆることに頭をめぐらし、この土地に必要なことがなにかを考えておいでだ。ただひとつ、結婚なさっていらつしやらないのが残念で」

「大佐、それはまたなぜでしょうか？ なぜ結婚してなきやならないんです？」芸術作品と言つても過言ではないボトルをつかむと、ムンデイーニョはもう一杯注ごうとした。

「いやいやもうこれくらいで：この酒はすいぶん高級ですな。ただ正直申し上げて、わしは安ピンガの方が好みでして：こちらのお酒にはどうも騙されているような。香りは良いし、甘いし、まさにご婦人向きの一品で。それにえらく強い。知らないあいだに酔ってしまいそうです。安ピンガならそんなことはありません。あれにはだれも騙されませんからな」

ムンデイーニョは戸棚から安ピンガを引つ張り出してきて言った。

「大佐、好きな方をどうぞ。でも、なぜわたしが結婚してなきやならないんでしょう？」

「それはですなあ、ひとつ知恵をお貸ししてよろしいか？ 地元の人さんと結婚なさい。わしの娘たちを差し上げるわけにはゆかないので。なにしろ三人とも片づいて、おかげさまで幸せな結婚生活を送っているもんですから。でも、ここにもイタブーナにも立派な若い娘さんはたくさんおります。地元の人さんと結婚なされば、金儲けだけが目的の流れ者とあなたさんを見る者はいなくなりますよ」

「大佐、結婚とは人生の一大事です。まず理想の女性に出会わなければならぬ。結婚は愛から生まれるものですから」

「あるいは、必要から。ちがいますか？ 畑じゃあ、作男たちはスカートさえ穿いとりや棒切れとだつて結婚しますわ。家において、一緒に寝られて、話のできる女が欲しい、ただもうその一念で。女ちゆうもんは役に立ちますからね。ご想像も及ばんでしようが。政治活動さえ助けてくれます。子どもは作ってくれるし、世間の尊敬も与えてくれる。それ以外なら娼婦に任せればいいわけで：」

ムンデイーニョは笑った。

「大佐は選挙戦のために多大な犠牲を要求していらつしやる。もし結婚していなければ選挙戦が戦えないとするなら、私は今からもう負けております。私としてはそんな勝ち方などしたくありません。私は自分の綱領で勝利したいんです」

ムンデイーニョは、地域の問題ばかりでなくその他の多くの問題にたいしても解決策を提案し、そこに至る道のりを提示し、展望を描いてみせながら、まるですべてがすでに解決してしまつたかのような口調で熱心に語り、その熱は聞いているブランドン大佐にも伝わった。

「たしかにおつしやるとおり。ご意見は十戒の石版に書かれたように正しい。異論の余地はありませんな」と言つて、今度は床をじつと見つめた。大佐は、バストス一族から見放された奥地にぼつんと暮らす苦しみを、いくども感じてきたのである。「この住民に正しい判断が下せれば、あなたが勝ちになるはずです。州政府が認めるかどうか、それはまた別問題ですが：」

ムンデイーニョは微笑んだ。これでやつと大佐を説得できた、と思つた。

「ただ、ひとつ問題があります。あなたさまは正しいんだが、ラミーロ大佐には友人がいて、たくさんの方が恩恵を被っている。親類縁者や仲間も多い。みんな大佐に投票する習慣が染みついたりします。そこでひとつお尋ねしたいんだが、大佐と取引なさるおつもりはないかね？」

「取引って、どんな？」

「あれと組むんですよ。あんたは頭脳も明晰なら、先見の明もある。一方、ラミーロ大佐は威光があるし、選挙民をおさえている。大佐には別嬪のお孫さんがいますが、ご存じですか？ もうひとりはまだ小さいけど。二人の親父はアルフレード博士です」

ムンディーニヨはしびれを切らして言った。

「大佐、それは無理です。私の考え方は大佐もお分かりになってくださったと思いますが、ラミーロ大佐はまったく考え方が違います。あの人は道を敷いたり町に庭園を作ったりすることだけが政治だと思ってる。合意点が見いだせるとはどうい思えません。私が提案しているのは労働や行政にかんする綱領です。ブランダン大佐の票田をお願いしているのも私個人のためではなくて、イリエウスのため、カカオ地域の発展のためなんです」

カカオ大農場主はぼさぼさの頭を掻いた。「ムンディーニヨさん、わしがここに来たのは自分のカカオを売るためだ。よい値で売れた。満足しております。あんたとのおしゃべりにもすっかり満足だ。お考えも分かかってきた」と言って輸出業者をじっと見据えた。「この二十有余年、わしはずっとラミーロに票を投じてきました。いざこざがあったときにあの人が必要だったからではありません。わしがリオ・ド・ブランに着いたときには、まだ人っ子ひとりいなかっただし、その後現れたやつらときたらクズばかりで、追っ払うのにわざわざあの人の手を借りるまでもなかつた。それでもラミーロに投票するのは習慣になっていて、ラミーロの方もわしに危害を加えたことはありません。喧嘩を吹っかけてくる奴がいたときなんか、わしに味方してくれましたよ」

ムンディーニヨが口をさしはさもうとすると、大佐は身振りで制して言った。

「たしかなことにはなにひとつお約束できません。考えてはおきませんが。ただ、お話しする機会はこれから持ちましょう。それだけ

は間違いなくお約束申し上げられます」

大佐は帰った。残された輸出業者は、無為に過ぎた時間を思つて怒りがおさまらなかつた。午後がほとんど潰れてしまったのだ。事実、紛うことなきリオ・ド・ブランの領主様がお帰りになられた直後に姿を見せた隊長に、ムンディーニヨはこう語った。

「あのほけ老人、おれをラミーロ・バストスの孫娘と結婚させたがってたぜ。『たしかなことはなにひとつお約束できませんが、お話しする機会はこちらから持ちましょう』だとさ」と言いながら大農場主の歌うような口調を真似して見せた。

「また会うって言ったのか？ そりゃ期待できるぞ」と隊長は勢い込む。「なあ、あんた。あんたはこの大旦那衆のことがまだよく分かってないようだ。アルティーン・ブランダンのことはとくに。あいつの言ってることは額面通りに取って良いんだよ。もしあんなの言葉に胸を打たれるものがなかつたら、敵陣に留まるって面と向かつて言つてたはずだ。さて、あいつがおれたちの味方になってくれるとすると……」

書店では議論が尽きなかつた。一方、クロヴィス・コスタはますます不安になっていた。四時をまわったというのに『日刊イリエウス』の売り子が姿を見せないのだ。

「編集室に行つてどうなつてるのか見てくるわ」

マルヴィーナを含む修道女学校の女学生たちがやってきて井戸端会議は中断した。女学生たちが「薔薇色文庫」の頁を繰り始めたので、ジョアン・フルジェンシオが応対に出た。マルヴィーナは書棚に目を走らせ、エッサ・デ・ケイロスとアルヴァレス・デ・アゼヴェードの小説を取り出すと、ばらばらめくる。イラセーマが近づいてきて意地悪そうな笑みを浮かべた。

「この店には『アマーロ神父の罪』もあるわよ。あたしあの本さ、読もうと思つて手に取つたのよ。そしたらお兄ちゃんに、年頃の娘が読む本じゃないって取り上げられちゃった」イラセーマの兄はバ

イーアの医大生である。

「どうしてお兄さまは良くて、あなたはだめなの？」マルヴィーナの目には例の奇妙な反抗の光がちらついている。「ジョアンさん、『アマール神父の罪』はございます？」

「ございます。お買い求めですか？ 一大口マンスですよ……」

「買います。おいくらでしよう？」

イラセーマは友人の豪胆さに驚いた。

「あなたほんとうに買うの？ みんなが何て言うかしら？」

「そんなことどうでもいいわ」

ディーヴァも少女向きの小説を一冊買い、友人たちに貸してあげると言った。イラセーマがマルヴィーナに頼み込む。

「あなたが読み終わったら、貸してね。でもみんなには秘密よ。あなたの家で読ませて」

「このごろの若い娘ときた日にゃ……」と、居合わせたふたりの男のうちひとりが言った。「いかかわしい本でも買うんだよな。だからジェズイーノの一件みたいなことが起きるんだ」

ジョアン・フルジェンシオが言葉を遮る。

「馬鹿なこと言うんじゃないよ、マネカ。なんにも分かってないくせに。あの本はな、とつても良い本でいかかわしいところなんかこれっぽっちもありゃしないんだ。あのお嬢さんだってインテリだぞ」

「だれがインテリですと？」先ほどまでクローヴィスが座っていた椅子に腰掛けた判事が興味津々で割り込んできた。

「これはこれは判事先生。わたしどもエツサ・デ・ケイロースの話をしております」と、ジョアン・フルジェンシオは判事の手を握った。

「じつに教育的な作家ですな……」判事にとってはあらゆる作家が「じつに教育的」だった。判事は法学から文学まで、科学から心霊術まですべてごちゃ混ぜに大量の本を買い込んでいた。噂によれ

ば、本棚を飾り立てて町の名士を気取りたいために買い込んでいただけで、実際は一冊も読んでいないらしい。ジョアン・フルジェンシオはいつものようにこう訊いた。

「判事先生、となると、アナトール・フランスなどお好きでしょうなあ？」

「じつに教育的な作家ですな……」と、判事が涼しい顔で答える。

「いささか不遜な作家とはお考えになりませんか？」

「不遜？ ああ、まあいささか。でもじつに教育的ですな……」

判事の姿を見ているうちに、ナシブはまた心の傷が疼きだした。

この放蕩じじいめ……ガブリエラのバラをどうしやがった。どこに置いてきやがった。ボールが混み出す時間だった。おしゃべりはここまでだ。

「おう、あんた、もう行くのかい？」と判事が興味津々で探りを入れてくる。「良い女を雇ったな。おめでとう。で、何ていう名前だい？」

ナシブは外に出た。あの放蕩じじい……ガブリエラの名前まで訊いてきやがった。破廉恥な糞じじいめ、判事としての世間体すら気にしていない。いやそれどころか、あれで州高等裁判所の判事にまでなろうっていう話じゃないか……

広場に入ると、遠目にマルヴィーナの姿が飛び込んできた。浜辺に続く並木道で技師と話し込んでいる。娘はベンチに腰をかけ、ローム口はその脇に立っていた。マルヴィーナはいかにものびのびと呵々大笑している。ナシブは娘のこんな笑い声を聞いたことがなかった。技師は結婚しているが、妻は気が違って精神病院に入っている。マルヴィーナもいざれそのことを知るだろう。ボールの店先からは、ジョズエーもこの光景を見ていた。穏やかな午後に響き渡るきらめくような娘の笑い声を、憔悴しきった面もちで聞いている。ナシブはジョズエーの横に座ると、孤独な青年と悲しみを分かち合った。若い教師は、魂を蝕む嫉妬の苦しみを必死に隠そうとし

ている。アラブ人はガブリエラのことを考えた。判事、マヌエル・ダス・オンサス大佐、プリーニオ・アラサー、その他大勢の男たちがガブリエラを取り囲んでいる。このジョズエーだつて、詩を捧げているのだから、まんざらでもないのだから。まどろむようなイリエウスの午後、広場はどこまでも静まりかえっている。グロリアが窓から身を乗り出していた。嫉妬で弾みのついたジョズエーは顔を上げ、レースが広がり乳房がでんと構える禁断の窓辺に目を向ける。帽子を取ると、世間の醜聞もなんのその、遠慮なくグロリアに挨拶を送った。

浜辺ではマルヴィーナが笑っている。甘く穏やかな午後だった。そのとき通りを走ってきたのは伝令役のちびくろトウイスカだった。吉報か凶報か。息をはずませながらテーブル脇で止まった。

「ナシブさん！ ナシブさん！」

「トウイスカ、どうした？」

「『日刊イリエウス』にだれかが火をつけた」

「何だ、燃えてるのは？ 建物か？ 輪転機か？」

「ちがうよ。新聞だよ。道に新聞集めてさ、灯油ぶっかけて。聖ジョアンの晩のたき火みたいだ……」

新聞と心に点けられる火、かけられる水

幸運にも居合わせた人たちがいて、かろうじて燃えていない水浸しの新聞を灰の山からどうにか救い出すことができた。燃え残った新聞は水がかけられ、ブリキ缶やバケツに入れられて、職工や従業員や手を貸してくれた人たちで運び出された。道に広がった灰が午後の微風にあおられて巻き上がり、焦げた紙のにおいをあたりに漂わせている。

博士は、新聞の編集室から持ち出してきた机によじ登ると、怒り

で顔を真っ青にし、声を詰まらせながら、『日刊イリエウス』の周囲に群がった野次馬に向かって演説し始めた。

「トルケマード（スペイン異端審問所の初代大審問官）の亡霊たち、檻樓をまとったネロの末裔、カリグラの馬どもよ。お前らは思想と戦つてうち負かせんとした。文字に書かれた思想が放つ啓蒙の光を、全て灰燼に帰せしめる罪と蒙昧の暗き炎によって蹴散せんとした！」

何人かが拍手をした。ちびくろたちは楽しそうに手を叩き、ヒューヒュー口笛を鳴らす。興奮で沸き上がった人々を前に、上着のどこかに鼻眼鏡を落としてしまった博士は、感動に身を震わせながら両腕を伸ばすと、拍手を抑えて続けた。

「民衆よ。おお、文明と自由の土地イリエウスの民衆よ！ 決して許すまじ！ しからずんば、累々たるわれらが屍を踏み越えて、文字に書かれたる言葉を迫害しに闇の異端審問がこの地に迫り来るであろう。通りにはバリケードを、角々には演壇を築こうではないか……」

すぐそばの黄金のピンガでは、戸口の傍のテーブルに陣取ったアマンシオ・レアル大佐が、博士の燃えるような演説を聞いていた。残された片方の目がきらきら光っている。外を見ながらにやりと笑つて、ジェズイーノ・メンドンサ大佐に話しかけた。

「今日の博士はノリノリですなあ……」

ジェズイーノは訝しげに言う。

「まだアーヴィラ家の話は出てないようですな。アーヴィラ話のない博士の演説なんてつまらんね」

このテーブルから二人は事件の展開を逐一追っていた。農園からは武装した男たち、つまりは用心棒がやってきていて、新聞社のすぐ近くに張り込み、時を待っていたのである。刷り上がったばかりの新聞を抱えて印刷所から出てきたちびくろたちは、この用心棒たちにすっきり取り巻かれた。それでも売り声を上げることでちびくろたちも何人かはいた。

『日刊イリエウス』！『日刊イリエウス』がついに発売。技師が到着したよ。州政府は完敗……」

パニックに陥ったちびくろたちの手から新聞が奪われた。何人かの用心棒は編集事務所と印刷工場に入り、残りの新聞を持ち出した。後日談になるが、クローヴィス・コスタの原稿や話題のコラム、三面記事を校正して副収入を得ているあわれなポルトガル語教師老アッセンデイーノは、すっかりおびえて両手を合わせ、お祈りでもするようにこう言ったらしい。

「殺さんでくれ。わしには家族もいるんだ……」

歩道に寄せて停められたトラックには灯油缶が載っていた。すべてお見通しの計画だったのだ。火炎は高々と立ち上り、家の正面壁をなめんばかりの勢い。人々はわけも分からず炎を眺めて立ちつくすばかりだった。用心棒たちは、習慣どおり退路を守るために、二三発空中に銃をぶっ放して人だかりを蹴散らすと、トラックに乗り込む。車はクラクションを鳴らしながら町の中心を走り抜け、途中、輸出業者のスチーヴンソンを危うく轢きそうになりながら、狂ったようなスピードで高速道路の方へと消えていった。

物見高い人たちが商店や雑貨店の戸口に群らがつたり、新聞社に向かったりし始めていた。アマンシオとジェズイーノは立ち上がりもしなかった。今いるテーブルが戦略的に絶好の位置にあったからである。店の扉に突っ立っている男が視界を遮っていたので、アマンシオが例の優しい声で願ひ出した。

「すまんが、ちょいと前をどいてくれないか……」

聞こえていないようだったので、男の腕をつかむと言った。

「どいてくれと言つとるに……」

トラックが立ち去るとアマンシオはビールのグラスを持ち上げ、ジェズイーノに微笑みかけた。

「お掃除作戦……」

「大成功ですな」

自分たちに注がれる好奇の目も気にせず、二人はボールに居座った。向かいの散歩道では人々が立ち止まり二人を見ている。今日の用心棒たちがアマンシオ、ジェズイーノ、メルク・タヴァレスの用心棒だと気づいた人は多かった。すべてを統括し、男たちに指令を出していたのはロイリーニョとかいうアマンシオの代子である。娼家で喧嘩騒ぎを引き起こしては飯を食っているプロの扇動家であった。

クローヴィス・コスタが現場に到着したのは、ちょうど火を消し始めるころだった。リボルバーを引き抜くと、果敢にも事務所のドア前に立つ。ボールのテーブルから様子を眺めていたアマンシオは軽蔑したようにこう言った。

「リボルバーの持ち方さえ知らないくせに……」

ぽつぽつと友人が駆けつけはじめ、やがてにわか街頭集會が開かれることになった。この日の午後、残りの時間はさまざま人がやってきてはクローヴィス・コスタに支持を表明した。

ムンデイーニョも隊長と一緒^{カビケン}に現れ、クローヴィス・コスタを抱きしめる。新聞の編集長は繰り返しこう述べた。

「仕事上のもめ事です……」

その日の午後、グローリアの窓の下に現れ、ニュースに渴いた女を満たしてやったのはちびくろトウイスカではなかった。トウイスカは編集室の前で他のちびくろたちに指示を出すのにてんてこ舞いだったからである。その役を引き受けたのは、用心も受けるべき敬意もかなくなり捨てたジョズエー先生だった。顔はかつてないほど青ざめ、目をロマンチックなヴェールが被い、心は喪に服している。一方、マルヴィーナは技師と連れ立って散歩道を歩いている。ローム口は海へ向かって歩を進めている。おそらく仕事の話をしているのだろう。ナシブはジョズエーを新聞社にむりやり引きずって行ったが、先生は数分だけしか居なかつた。本当に関心があるのは浜辺の出来事の方、つまりマルヴィーナと技師の会話だった

のである。教会の戸口では老嬢たちがセシリー神父を囲んでもう火事の噂話をしている。燃えた新聞なんてどうでもいいといわんばかりに海の前でけらけら笑うマルヴィーナの声に、ジョズエーはついに堪忍袋の緒を切った。事件の原因といえば、そもそも、技師じゃあないか。偉そうにあの新参者が、突然不安に落ち込んだ町を一顧だにしないからだ。マルヴィーナとの会話ばかりに夢中で。ジョズエーは広場を横切ると老嬢の間を突っ切ってグローリアの窓に近づいていった。ムラータはぼつりとした唇を開いて微笑んだ。

「こんにちは」

「こんにちは、先生。なにかありました?」

『『日刊イリエウス』の最新号に火がつけられたんだ。やったのはバストスの手下だな。今日やってきたあのアホ技師が原因だよ!』

グローリアは広場の並木道の方に目を遣った。

「いま先生の恋人とお話しになっていた青年のこと?」

「ぼくの恋人だつて? 間違っちゃ困る。あれはただの知り合いだよ。ぼくが眠れないほど思っているひとはイリエウスでただひとり!」

「あらだれかしら。教えてくださる?」

「どうしようか」

「思い切って、ねえ!」

教会の戸口では老嬢たちが目を丸くして見ている。並木道のマルヴィーナは二人に気づいていなかった。

(続く)